



監督・脚本・製作＝ジョー・キャンプ／出演＝ベンジー／シャギー／ジプシー／ジンジャー／ニック・ウィテカー／クリス・ケンドリック／クリスティ・サマーヘイズ／ニール・パース／ランドール・ニューサム／ドウェイン・スティーヴンス／メリнда・ヘインズ／ネイト・バイナム（東芝エンタテインメント配給／2004年アメリカ映画／97分）

……「ベンジー映画」は1974年以降5作目という由緒あるもの。純血種のママに似ていないという理由で捨てられたベンジーの愛くるしさはもちろんだが、犬を主人公とした映画が、これほどドラマティックで楽しいとは意外……。子供の頃に観た『名犬ラッシー』を思い出しながら、徐々に童心に戻り、楽しい時間を……。

ジョー・キャンプ監督と『ベンジー』シリーズ

今57歳の私が知っている、犬を主人公としたテレビドラマといえば『名犬ラッシー』と『名犬リンチンチン』で、ベンジーという犬は全然知らなかったが、1974年の映画『ベンジー』によって新たに生まれた一匹の大スターの名がベンジー。この映画は、その年『ジョーズ』と『タワーリング・インフェルノ』に次ぐ年間第3位の興行成績を記録したというから驚き。そして以降、この『ベンジー』シリーズは4本の劇場映画、4本のTVスペシャル、1本のTVシリーズが製作され、本作は5本目の映画。そして、映画は延べ7300万人、TV視聴者は10億人にもものぼる大ヒットとなったとのこと。

驚くべきことは、これらのシリーズをすべて、ジョー・キャンプ監督が手がけていること。『ベンジー』シリーズ以外にも2本の作品があるらしいが、これだけベンジーに固執するのは、よほどの犬好き……。今回のベンジーは、数カ月に及ぶ大々的なベンジー探しを行った結果、ミシシッピ州のサウス・ミシシッピ

動物愛護協会でキャンプ監督に見出された4代目とのことで、相棒のシャギーと共にこのキャンプ監督の下で暮しているとさ……。

犬の物語には少年がお似合い……

『名犬ラッシー』には9歳の少年ジョンが、『名犬リンチンチン』には孤児のラストイー少年が登場するように、この映画にはコルビー少年（ニック・ウィテカー）が登場する。それは、犬の物語には少年が1番お似合いだから……。

この心やさしいコルビー少年はかなり変わり者とみえて、彼が森の中に秘かに作りあげた「秘密基地」はかなり凝ったもの……。

彼は純血種のママ、デイジーに似ていないという理由で捨てられたベンジーをここに匿い、おうむのマーリン（ジブシー）と共に1年間しっかりとベンジーを育てあげた。満1歳、人間なら15歳になったベンジーは今や立派に一人立ちし、利口で元気な成犬に……。

抵抗勢力は……？

昨日9月20日をもってその任期を終えた小泉純一郎自民党総裁の、総理・総裁としての目立った手法は、高い国民的人気を背景とし、敵＝抵抗勢力をあぶり出し、国民に二者択一を迫ったこと。

それとよく似た形で、この映画に抵抗勢力として登場するのは、「純血種でない犬はいらない」と言ってベンジーを捨ててしまい、母親にどんどん子犬を産ませては売りさばいて儲けることしか考えていないひどい男である、コルビーの父親のハチェット（クリス・ケンドリック）。

野良犬となったベンジーやその相棒のベロンチョ（シャギー）を捕獲すべき任務を負う動物保護管理局の「でこぼこコンビ」の太っちょ、シェルドン（ドゥエイン・ステューヴンス）とのっぼ、リビングストーン（ランドール・ニューサム）は、当初はコルビー少年やベンジーにとって抵抗勢力だったが、ベンジーの知恵によって黒犬デイジーを捜し出すという彼らの任務を遂行することができたことによって、がぜん協力勢力に変身……。

ホントにここまで利口なの……？

プレスシートによれば、4代目ベンジーは、キャンプ監督がミシシッピ州ゴルフポートにあるサウス・ミシシッピ動物愛護協会で見出した犬だが、監督のベンジー選出の基準は「表情の豊かさ」。つまり、動きや目で、悲しみや苦しみ、楽しさや幸せ、愛情といった感情を表現できるかがポイントだった。4代目ベンジーは、トレードマークの垂れ耳に、ぬいぐるみのようにしゃくしゃくふわふわとした毛並み、きよろきよろと動くまん丸の瞳を持った犬。したがってキャンプ監督は、「なぜこんなに賢くて愛嬌のある犬が捨てられたのか？」という疑問から、この映画のストーリーの原型をイメージしたとのこと。

ハチェットは、ベンジーだけは純血種のママに似ていないとして捨ててしまったが、とにかくデイジーにたくさんの子供を産ませ、その子供たちを高く売ることだけを考えているイヤな奴。そんな無理なお産がたたったデイジーは、今病気になるに弱ってしまっていたが、ハチェットはデイジーを檻の中に閉じ込めたままでロクな手当てもしていない様子。そんな状況を知ったベンジーの任務は、檻の鍵を開けてデイジーを外に連れ出すこと。

そして、デイジーがそんな状態になっていることをシェルドンとリビングストンに知らせ、ママを助けてもらうこと。しかし、犬ってホントにそんなに利口なの……？ それは映画を観てのお楽しみに……。

動物保護管理局とは……？

この映画には、動物愛護協会とは異なる動物保護管理局という組織が登場するが、これは多分日本には存在しない役所で、一方では犬の虐待を防止し、他方では野良犬狩りをして飼い主を探したり、動物愛護協会に引き取らせたりするのがその任務のよう。

しかし、飼い主が飼い犬を虐待しているのか否かについての認定は微妙で、この映画のように飼い主のハチェットとのっぼと太っちょの上司ミリアム（メリンダ・ヘインズ）との間で、言い分が対立することがあるのは当然。

スクリーン上で観る限り、非がハチェットにあることは明らかだから、観客は

ミリアムや、ミリアムを応援する保安官のオジー（ネイト・バイナム）がうまくハチェットをあしらうサマを観ていればよいのだが、弁護士目で見れば、実際にそんな争いになった場合は大変だろうナという思い。

ちなみに、アメリカにそんな役所があるのに日本にはないというのは、日本の方が動物愛護の精神が乏しいということかも……？

たまにはこんな映画も……

観る映画の数が最近ますます増え、ほとんど毎日1本ペースになっている私としては、ポチポチ本当に観たい映画とそうでない映画を仕分けしなければならないのかもしれない。

そうすると、まず私が切り捨てるのがアニメ映画やコミック映画そしてホラー映画だが、この『ベンジー』シリーズのようなたわいもない映画もどちらかという切り捨て対象に入りそう……？ しかし、今回私がそうしなかったのは、チラシに載っている犬の姿がかわいかったことと、単純な物語でもきっと心温まるいい映画だろうと思ったから……。

そんな私の予想がスバリと当たり、映画鑑賞後はほのほのとした気分……。難解な映画ばかり観ていると疲れるので、たまにはこんな愛くるしい主人公を観ながら、リラックスするのもいいものだと実感……。

2006（平成18）年9月21日記